

みなさんの身近な話題・行事・出来事などの情報をお寄せ下さい。
 深浦町総合戦略課 企画調整係
 電話 74-2122

ウォッチング

安全運転をお願いします

9/22

秋晴れの中、春に引き続き「秋の全国交通安全運動」の街頭指導が、役場前とJR十二湖駅前の国道2か所で行われました。

鱈ヶ沢警察署、鱈ヶ沢地区交通安全協会、交通指導隊、深浦町議会及び深浦町交通安全母の会の会員が参加し、反射材用品や明るい色の衣服の着用促進、夕暮れ時の早めのライト点灯などについて、チラシと啓発グッズを配りながらドライバーへ安全運転を呼びかけました。



ドライバーへ声をかける平沢町長

紀本さん、100歳を迎える

10/17

轟木地区の「はまなす荘」に平沢町長が訪れ、100歳になられた紀本かね子さんの長寿を祝い、顕彰状と記念品を贈りました。

紀本さんは1925（大正14）年東京都吉祥寺出身で、子供7人、孫10人、たくさんのお孫に恵まれました。

この日、家族とともに顕彰状やお祝いの花束を受けとり、うれしそうなお顔をうなずく紀本さん。園長から「紀本さんはハーモニカがとてもお上手なんですよ」と得意なことを紹介されると、施設の職員に促され、大好きなハーモニカを一節披露。

この日ホールに集まった入所者の皆さんから大きな拍手を受けていました。



張摩さん、100歳を迎える

10/23

張摩みよさんは1925（大正14）年、弘前市生まれ。夫の国義さんと結婚し、子ども5人、孫8人、ひ孫12人に恵まれました。

張摩さんは、お話をするのが大好きで、施設に面談に来たお孫さんとおしゃべりするのが一番の楽しみとのこと。現在は施設で生活しており、自ら作ったリハビリメニューを毎日欠かさず行っていて、とても100歳とは思えないほど元気に過ごしているそうです。

10月19日に100歳を迎えた張摩さんは、「家族や施設の方々のおかげで、健康でいることができました。ただただ感謝でいっぱいです」と周囲の人たちへの感謝を伝えました。



初開催！

深浦町移住者意見交換会

9月16日、役場2階中会議室において「深浦町移住者意見交換会」が開催されました。

本会は、移住者の方々の意見を伺うことで、地域の魅力や課題を再発見し、今後の地域づくりや移住者同士の交流促進に繋げることを目的として行われました。

当日は、次の5つのテーマについて意見交換を行いました。

- ① 交通に関する課題
- ② 若者の出会いの場と婚活支援に関すること
- ③ 地域経済の活性化に関すること
- ④ 地域コミュニティに関すること



意見を交わす参加者たち



⑤ 行政サービスと情報提供に関すること

交通に関する課題では、「バス停が道路の片側にしか設置されていない箇所があり、移住者や観光客がどちらの方向のバスに乗ればよいか分からず混乱することがある」、「手を挙げてバスを停めるというローカルルールが十分に周知されておらず、乗り過ごしてしまう」といった意見が寄せられました。

会の終了後には、参加者から「大変有意義な時間となりました。今後定期的に開催してほしい」との声が上がりました。

F-ミーティング

深浦ねぶた祭実行委員会

10月14日、町長と町民グループが地域の活性化・住みよみふるさとづくりなど、よりよいまちづくりのために意見交換を行うF-ミーティングが開催されました。第4回を迎えた今回は、深浦ねぶた祭実行委員会（木村大希会長）のメンバー7人が参加し、今年6年ぶりに復活した深浦ねぶた祭の実績や来年以降の開催、ねぶたの制作・保管場所についてなど、平沢町長と意見交換を行いました。

深浦ねぶた祭実行委員会は、町内の有志が集まり結成された団体で、今年の8月に開催されたねぶた運行に向け、4月からねぶた制作を開始。町内の子どもたちを対象とした紙貼り体験や、ねぶた踊り・ねぶた囃子の講習会など、6年ぶりのねぶた運行に向けて様々な活動をしてきました。

準備期間中から、「頑張れ」「楽しみにしている」という声を町民の皆さまから多くいただいたおり、紙貼り体験や運行当日は予想を超える人数が集まったとのことでした。しかし、ねぶた制作の経験者不足や運行当日に予定していたコースを回り切れなかったなどの課題もあり、今年の活動について振り返っていました。



実行委員会のメンバーからは来年度以降も実施するために、制作場所の確保や環境改善、ねぶたの保管場所、制作や運行に係る費用についてなど、町にも協力してほしいという意見が出ました。また、紙貼り体験だけではなくねぶた制作全体を体験できるようにねぶた岩崎地区・大戸瀬地区の子どもたちにも参加してもらう方法、運行路へのキッチンカーなどの出店など、来年度以降、より盛り上げていくためにはどうすればよいかを話し合いました。

平沢町長は「深浦ねぶた祭実行委員会のような団体が育ち、輪が広がっていくのは理想的な形。来年度以降の開催に向け、町として協力できる部分は協力したい」と語りました。